

うなさか

杉山幌

Illustration
キナコ

おれはここにいない。大きな運動公園のベンチに座って瑞穂みずほを待っているおれは、おれ自身を見ているような感覚に包まれていた。重苦しい湿気が纏まとわりついてシャツを体に薄く貼り付かせ、汗の臭いが混じり揮発して咽むせるような水っぽいニコチンの臭いが立ち昇り、呼吸する度たびに鼻の奥にぬめりついて気持ちが悪いく。この汚水のような臭いが先ほどから急にそれと感じられるようになったのは、このベンチから歩いてすぐのところポット池があつて水場が近いせいに違いなかった。

足元に猫が寄つて来た。元は白かったのだろうが、薄汚れたカーペットのような色合いの体はみすばらしく、長い年月をかけて溜ためまった目ヤニが茶色い固まりになって筋を作っている老いた猫だった。おれが右足を細かく動かすと猫は一瞬警戒したように体をくねらせたが、すぐに揺れる靴紐が自分の為の遊具であるかのように誤解して前足を伸ばし触ろうと試み、おれが右足を捻ひねって避よけると執着心をあらわ

しながら踵かかとを回り込んで紐を追いかけ、おれの足首を支点にぐるぐると回る。この猫を殴りたいな。踏み潰つぶしたいな。殺ころしたいな。

「洗こくんは、猫様ねこようのものが好きなの？」

瑞穂の、少し細い声こゑがした。

「ああ、大好きだよ」おれは嘘をついた。「おれは猫にだけは目が無いんだ。目に入れても痛くないくらい好きで、目に余るほど好きなんだ。というかなんだよ、様ようのものって」

「なんか、警察の人が言つてたよ」隣に腰掛けながら瑞穂は言う。「拾しゅうとく得物を書類に書くときに、ピニール袋ピニールだったら『ピニール様ピニールのもの』とか書くんだって。全国的にそうなのか、その人のいる地域だけなのか、わからないけど」

「ふうん、帰かえったら奏そうに教えてやろう」

おれは、トリヴィアルな知識を貯め込むのが好きな双子の妹のことを思った。

「奏ちゃんの具合はどう？」

「具合ってなんだよ、病人みたいに言うなよ」

「あ、ごめん、そういう意味じゃなくって」

瑞穂は弁解するように首を振った。いま、おれには二つの選択肢がある。謝罪を受け入れるか、線を引くか。迷うまでもなかった。

「嘘つくなよ。普通具合なんて言わないよ、お前は病人じゃない誰かの近況を尋ねる時に具合なんて言葉を使ったことあるのか？」

「ごめんね、ただ心配で」

「違うだろ」線を引く。ナイフでえぐるように強く歪な線を。「病人じゃない誰かの近況を尋ねる時に具合なんて言葉を使ったことあるのか？ って聞いたんだよ。答えになってないだろ。日本語わからないのか？」

「そうだね、具合なんて使わないね」

「日本語わからないのかって聞いてんだよ」

「わかるよ、私は日本語がわかります」

「当たり前だよ、日本語がわからなかったら質問が

成立しないだろう。しょうもない論理パラドックスじゃないんだよ下らない」

自分の下卑た残酷さに満足しながら、おれは煙草に火をつける。

「高校生が煙草なんて良くないよ。洗くん、たくさん吸ってるでしょ」

「おれは傷ついているから煙草でも吸わないとやってられないんだ、お前も知っている通り、おれは傷ついているんだ」

瑞穂に向かって煙を露骨に吹きかけた。咽ることも手で払うこともせずに瑞穂はただ煙たそうに目を細めておれの行為を受け入れた。ほんの少し、微笑んでさえた。おれは立場上逆らえない人間を醜悪なやり方で攻撃し、ストレスを発散している。胸の奥で痛みが細く響くような感覚がしたが、それは事故や病気で失ったはずの手足が痛む錯覚、幻肢痛と同じものだった。何故なら、痛みを感じているのは良心だから。

「一体なんの用だよ、呼び出しておいて下らないことじゃないだろうな」

「どうだろう。ねえ洗くん、法律ってなんだろうね」

「はあ？」瑞穂の迂遠うげんなもの言いに苛立いらだつ。「法律は線だよ、それこそ線様のものだよ、誰もが納得出来るよう最適化するのが目的で、まったく成されていないのが結果だよ。だって、お前らみたいな加害者側に圧倒的に有利なもの」

厭らしさを心がけながらそう言ったが、瑞穂は意に介していかないようでおれは退屈に感じる。瑞穂の表情はいつもと違い、風の無い湖面だった。

「時々意見があるよね、量刑は被害者に決めさせてあげれば良いじゃないかっていう意見が。もちろんそれは社会的には不可能なだけで、私は社会でもないし社会的でもないから、洗くんに決めさせてあげようと思って」

瑞穂はそこまでを、いつになく素早く人に口を差

し挟ませないような強い口調で言った。おれは唾を飲み込もうとしたが、渴いた喉が一度大きく引き攣ひきれるだけだった。

「ねえ洗くん、見て」瑞穂は携帯を取り出した。

「この子、この子を見てあげて」

そこには黒くて長い髪の少女が映っていた。おれと奏よりも少し上、十九歳の瑞穂と同年代であるような印象を受けた。はにかんで笑いながら眉の上に手を当ててピースをしているかわいげのある少女だった。

「この子、よく家にも遊びに来る友達だったんだけど——」突然、口を開けたまま呆ぼろけたような表情で瑞穂は動きを数秒止めた。「……『だった』とか、今自分で言っ**て**びっくりした。あー、いや参ったな、シヨックだあはは」

「そんなことどうでも良いよ、お前がどうであろうと——」

「死んだの。殺されたんだよ昨日、あの、人」

あの人。瑞穂の兄、大場明夫。五年前の春休みにおれたちの家に入り込み、十二歳だったおれと奏を三日間虐待し、奏を犯し、たった四年半の懲役で半年前に出所した男。

「私の友達だったせいで狙われた。昨日あの人を夜に帰ってきて、すぐに異常な感じに気づいた。足音でわかるんだよ、機嫌も感情の機微もね。私は背中がぞわぞわして粟立あわたつような感じがして、直ぐに頭が白く透明になつてもう何も考えられなくなつた。馬鹿だと思われるかもしれないけど、ただの足音でそうなるの。重い鉄がぶつかりこすれ合う不穏な音が長くして、そつと見てみたら鞆一杯にダンベルを入れてた——」

口元に持っていきかけた煙草が形を変える。灰の柱の一部が崩れ煙草の葉が燃えているオレンジ色が小さな楕円形を作って光を放ち、それを見続けていると逆に見返されているような、目が合うような錯覚が起こり、段々と自分が自分から乖離かいりしていくよ

うな感覚に包まれ、全てが遠のいた。自分が抜け落ちて離れていき視点となつて、自分を含む《光景》を定点カメラのように見ている。その《光景》の中でおれは少し疲れているように見えた。

「——私は意を決して、後をつけることにした。洗くんがいつも、あの男は必ずまたやるから監視しろって言っていたのが頭の中で反響した。それで、私は友達の死体、半裸の死体の上にかがみこんでいるあの人の姿を見た。生きている時に無理やり脱がせた筈はずのワンピースを、何故かあの人は丁寧に着なおさせてた。それを見て急に現実感がわいて、一度少し離れて携帯で動画を撮つた……」

携帯の画面が切り替わる、静止画から動画、生から死へと。暗い画面に激しい手ぶれ、少女を担いで歩く大場明夫の姿は、大きな影がひとりでうごめいているようだった。不思議とおれの心は乱れなかつた。おれはここにいない。離人感。離脱感覚。偶然手にした本にこういった《光景》を見ることにつ

いて書いてあったが、意味の無いことと思われた。おれがどうあれ、奏が四年以上ひきこもっていることに変わりはない。

「死体を処理したのを見届けて、私は洗くんの携帯にかけての」

おれは、ただ聞いている風だった。その表情は、殺人の話をしているようにも五年前の監禁虐待事件の被害者であるようにも見えなかった。

「……それは、どこでやったんだよ」

「あっち」瑞穂は指差した。「ボート池の向こうの森。多分あそこに連れ込んでレイプして殺したんだと思う」

おれはその方向を見た。運動公園の端に位置する森は広く、土地の権利関係で管理が行われていない為に、運動公園側から見るとただの森であるが、反対の道路側は粗大ゴミや産業廃棄物で溢れかえっている。公園の緑と違法のゴミ捨て場、二つの側面を持つ森だった。

「だからここに呼び出したのか。あの森なら昼でも誰も寄りつかないもんな」

森に大量の化学薬品が捨てられ、異臭騒ぎが起きたのは先月のことだった。それ以来幸か不幸か違法のゴミ処理業者すら、あの森には近づかなくなった。森自体が廃棄されたのだった。瑞穂は話を続けている。瑞穂が性犯罪者の家族であることを少女は気にせずにつき合ってくれたこと、そのせいで大場明夫に目をつけられたのではないかとこの悔恨、死体処理の顛末、そして――

「私の兄を、殺しますか？」瑞穂は当然のようにそう言った。「しばらく死体は見つからないと思うけど、やるなら早くしないとあの子もかわいそうだし、早めに連絡してね」

スカートの裾を払って立ち上がる瑞穂に、おれは不意に声をかけていた。

「おれ、猫が好きなのに見えたか？」
口をついて出た言葉はそれだった。

「ん？ 猫を足でちよいちよいやって遊んでたじゃん、好きそうに見えたよ普通に」

「そうだよな、そんなもんだよな、普通だよな、普通にそう見えるんだよな」

「何言ってるの？ 猫嫌いなのか？」

公園にいるおれと瑞穂もまた、普通の若い男女にしか見えなかった。

「好きだよ普通に、普通にね」

「何言いたいのかわかる気もするけど、洗くんは結構子供っぽいよね」

「調子に乗るなよ、レイプ魔の妹から人殺しの妹にクラスチェンジしたからって」

「ごめんなさい」瑞穂は恭しく頭を下げた。「新しく、より重大な被害者が生まれたから、洗くんにはもう苛められてあげられないの。本当にごめんね」

おれは鼻で笑ったが、犯されても殺されてもいないおれに返す言葉は無かった。

「ああそうだ、お母さんの具合はどう？」

具合という言葉を強調するようにはつきりと発音して瑞穂は聞く。

「順調だよ。五年前の事件で完全にぶっ壊れて、来月で閉鎖病棟三周年だよ。もう一生病院から出てこれないだろうな」

「そっか」

「少しは申し訳無さそうな顔しろよ。お前なんとも思ってねえだろ」

「うん」瑞穂はあっさりと認めた。「そんなもんだよ。加害者の家族っていつても、何年も経てば被害者の家族のことなんてどうでも良くなるよ。誰も言わないけど、そうなんだって。カメラの前では涙を流して謝罪しても、その内にお笑い番組を見て手を叩いて笑うようになるよ」

「じゃあお前は苛められるのがわかってて、なんでおれと一緒にいるんだよ」

被害者の兄と加害者の妹。おれたちは半年ほど前から会うようになった。大場明夫が出所するに当た

って報告と挨拶にやってきたのだと瑞穂は言った。それ以来時々会っては大場明夫の様子を聞き、瑞穂を詰り、責め、八つ当たりする関係が始まった。どれだけおれが辛く当たろうとも、瑞穂は時々連絡を寄越しては大場明夫に関する報告という体裁で、おれと会った。

「贖罪らしきことをして自分が救われたかったからだよ」

「正直だな」

「嘘だよ」瑞穂は笑った。この半年で瑞穂が笑うのを見たのは初めてだったと気づく。「私はもう十九だから、洗くんよりも大人だから、嘘をつくんだよ」

瑞穂が去ってから、おれはしばらくの間ベンチに座ったまま、ただぼんやりと目の前の風景を見ている自分を見ていた。雨が降ってきたのでそれをきっかけに家に帰ることにした。帰宅してパソコンを立ち上げ、ブックマークから奏が作ったおれたちだ

けのチャットルームに飛んで入室すると、ドアをノックするSEがいつもよりクリアに聞こえた気がした。奏は既に中にいた。

こうさんが入室しました

▼おかえり 遅かったね

▼ただいま ちよつと人と会ってたんだ

▼誰？

▼んー、友達みたいな

▼友達 友達ね それ、自慢？ おれには友達がいるよって、言いたいのか？ ひきこもりのお前とは違うんだぞって、そんな風に思ってるわけだ

▼どうしたんだよ、機嫌悪いな

▼答えになってないよ おかしいよね 私は会話の

キヤッチボールをしたくてボールを投げたのに、それを避けてどうしたんだよって、何それ

▼自慢してないよ ごめん

▽いいね洗は、楽しそうでも友達と楽しく遊んで

▽楽しんでないよ ごめんって そんなことで機嫌悪くするなよ

▽そんなことって どうして洗がそれを決めるの？ 私の中にも大きさはあるのに

そうさんが退室しました

パソコンの駆動音、ファンの回る音だけが虚ろに響いた。眼球の奥に鈍い痛みを感じながら一人になったチャットルームに同じ言葉が並ぶ。▽ごめんキーボードを叩きながらおれは壁を見る。おれたちはこの壁を挟んでパソコンの前に座り向かい合っている筈だった。距離にしてみれば一メートルも無い。誰よりも近く、果てしなく遠い双子の妹。もうおれは奏の姿を四年以上見ていなかった。またドアをノックするSEが鳴る。これが奏のやり方だった。何

事も無かったようにリセット。

そうさんが入室しました

▽即ち海境を塞へて返り入りましき

▽かいきょう？

▽うなさか うなさかをさへてかへりいりましき

▽どんな意味？

▽どうして自分で調べる努力をする前に人に聞くかな ネットの質問箱とかSNSとか、ひどいよね調べればすぐにわかることを聞いて、相手はどう思うかとか考えないのかな 聞く方も答える方も、馬鹿ばっか

▽わかったよ、調べる ちょっと待ってて

▽「うなさか【海境】」

海神の国と人の国とを隔てると信じられていた境界。海のさかい。海の果て。

▽お、ありがとう

▽ネットの辞書をコピペしただけ

わかるでしょ？ 私の力じゃない 私の言葉じゃない 私には何も無い

▽そんなことないよ 少なくともおれには大事な妹だよ 本当に

▽そんなことどうでも良いよ ちょっと黙ってて

私は海境について調べたんだ そしたらさ、色々な国にあったんだよ、似たような言葉、考えがね昔の人にとっては「海の果てはどうなっているのか」というのが、命題だったんだね 滝になつて流れてて、下では亀が支えてるとかね

私には、昔の人たちの気持ちがかかる気がするんだ、その不安が 果てはどうなっているのか「果て」が無いと不安なんだよ 線引きしないと自分が自分でいられなくなるっていう不安が、私にはわかるんだよ ひきこもりはきつとみんなそうだよ 自分の部屋とか家とかで線を引かないと、不安で苦しくて死んじゃうんだよ

▽なるほどー

▽何それ なるほどーって

▽いや、そんな風に考えたり、感じたりしてるんだなって

▽そんな風？ そんな風ってなに？

じゃあ私がこの部屋の中でどんな風に感じ、考えているのか、説明してみてよ

▽奏、頼むよマジで 何かあったのか？

そうさんが退室しました

そうさんが入室しました

▽元軍人 元代議士 元恋人 元なになに 元人間

なんてのは どうだろう

▽それはなに？

▽詩だよ 黒田三郎 洗の前に買いに行ってもらったやつだよ 私は言葉を持ってないから、引用するしかないんだ

▽ああ、詩集買いに行ったな、この前

▽その詩を読んで、私は元人間なんだって気づいた

わかった ようやく受け入れることが出来た あ

きらめることができた よかった 洗のおかげだ

よ やったね！

▽奏、ちよつと落ち着こうよ

▽またそうやって私をpushさえつけようとするんだね

▽違うよ ごめん

▽冗談だよ 機嫌悪いのは生理だから

▽そうなんだ 女は大変だな

▽女 女だから 女だから私はレイプされたんだよ

ね 洗は男で良かったね笑

▽ごめん 悪かったよ 軽率な発言だった 許して

くれ

▽洗はこの話になると決まって謝るよね 私が悪い

時でも 私は別に謝って欲しいわけじゃないのに

洗にとっては、あの出来事がよっぽど大きいんだ

ね

きつと今の私の存在全てよりも

なんだか私たちは

元双子みたいだね

そうさんが退室しました

悔恨は復讐へと彼を駆り立てていく……

続きは『Powers Selection - 新走 -』で!!